

# しものせき トピックス

Shimonoseki Topics



完成を祝ってテープカットを行う関係者とクスの森イメージキャラクター「クスジー」



子どもたちが触れるクスの森の幹周りは、県内1位の11.2m (3月24日)

## 高杉晋作の遺品寄贈 市立東行記念館で展示

市立東行記念館で4月14日(日)、高杉家から下関市に、高杉晋作ゆかりの遺品158点の寄贈を受けました。遺品の一部は、奇兵隊結成150年を記念して、企画展「高杉晋作と奇兵隊」の中で展示されています。

晋作が肌身離さず持ち歩くほど愛用していた道中三味線の他、ひさごや功山寺決起のときに身に付けていた具足などが披露されています。



遺品寄贈を祝ってテープカットを行う関係者

## 「川棚のクスの森」 整備完了

3月24日、国の天然記念物「川棚のクスの森」(豊浦町大字川棚)の整備が完了し、竣工式がありました。駐車場や園路、芝生広場などを整備し、新たな観光地として生まれ変わりました。

当日は、特別にクスの幹に触れられるように地元自治会の協力で通路が設けられました。来場した子どもたちは、樹齢約1000年のクスの幹の感触に興味深そうに確かめていました。

## 保健部マスコット キャラクター「こころん」!

市保健部では、健康づくりをはじめ、食育、自殺対策、動物愛護などの普及啓発活動のためのマスコットキャラクターを製作しました。名前は「こころん」です。「いのちのハーモニー」を奏でる下関へと「心」と「音」を組み合わせた、親しみやすい名前です。

製作にあたっては、東亜大学と下関学院の協力を得ました。今後、「こころん」は、保健部のイベントやパンフレットなどに登場します。



学校関係者に設置された看板の説明をする職員(日新中学校)

## 各避難所に 看板を設置

現在、災害時の避難所として、市内209施設を指定しています。このたび、避難所となる施設に避難場所であることが分かるように看板を設置しました。

看板は、縦約52センチ、横約36センチで雨水や太陽光などに強く、暗くても認識できるように蓄光タイプになっています。東日本震災を受け、今後想定される津波や高潮対策のため、各避難所の海抜を表示しています。



「こころん」とデザインを担当した東亜大学4年角裕貴さん





王臺の関付近

## 花であふれるまちへ はなまる 花〇唐戸第1回開催!

3月23日(土)、唐戸商店街を花と緑で埋め尽くすプロジェクト「花〇唐戸」がありました。下関造園クラブなどを中心に、地元住民など約100人が参加しました。

マーガレットやラベンダー、菜の花、ソメイヨシノなど約30種類の花や木を植え、色鮮やかに飾られた唐戸広場。市立大学のゼミ生が出店したカフェもあり、訪れた人々は春の香りに包まれ、コーヒーや会話を楽しんでいました。



唐戸広場に花を植える参加者

## 春満開! 維新・海峡ウォーク

維新ゆかりの地と海峡の景色を楽しみながら歩く「第28回維新・海峡ウォーク」が4月14日(日)にありました。約2万人の参加者は、維新の志士・高杉晋作が眠る東

行庵近くの吉田小学校をスタート。門司港レトロ口中央広場とシーモール下関の各ゴールを目指して約30キロの道を歩きました。参加者は、海峡沿いの景色と各関所に用意された飲み物や軽食などを楽しみながら歩きました。



一般開放された新設護岸

## みもすそ川公園に 新設護岸

平成11年の台風18号による高潮被害などを受けて、国土交通省下関港湾事務所は、平成21年度から高潮対策事業として海岸保全施設の整備を進めてきました。

みもすそ川公園沿いでの護岸新設工事が3月末に完成したことを受け、次の工事が始まる平成26年3月末までの間、一般に開放されています。

新しく開放的に整備された護岸から、関門海峡や関門橋を間近に眺めてみませんか。

しゅん・かん・びと



今、話題のひとを紹介します

平成25年4月1日に  
下関市立大学長に就任した

## 吉津 直樹さん

## 地域に愛される、市民に 愛される大学にしたい。

下関市立大学の学長に吉津直樹さんが就任しました。昨年の3月に退職するまで、30年以上「市大」一筋。地域問題に関心があり、地域がどうすれば豊かになるか、特に地元・下関、山口県の都市や過疎地域を対象に調査・研究をしてきました。最近では、都市生活者が農村、漁村などに滞在して余暇を過ごす、グリーン・ツーリズムに関心を持っています。少年時代はわんぱく坊主だったとのこと。地図に興味があり、枕元に地図帳を何冊も積み重ねて楽しんでいました。それが高じて地図マニアになり、今の仕事につながっています。「市大」は市外から来ている学生が多く、学生生活の中で、下関の歴史や文化に触れずに卒業し、離れていく学生がたくさんいます。こうした状況をもったくないと考え、下関の歴史を学術的に触れるきっかけとして教員三人で「下関マップ」を作成し、新入生全員に配布しました。「自ら地域に出ていき、どんどんその地域の物や人と触れ合ってほしい。触れ合いを大切に、地域と大学が一緒になってまちの活性化を考えることで、これからもっと地域に愛される大学にしたいと思います。小規模大学だからこそアットホームな大学にしたいですね。そのためには教員と学生の触れ合いが大切です」と「市大」にかける熱い思いを語ってくれました。

